第22回IARU ARDF世界選手権大会レポート
2025年8月16日～22日　リトアニア共和国で開催

2025年8月16日から同月22日の間，リトアニア共和国の首都ヴィリニュスから西に約100km離れたビルシュトナスのリゾート地区を拠点に，その周辺の森林で第22回IARU ARDF世界選手権大会が開催されました。25か国から310名の選手が集まり，珍しい国としてはインドから1名の参加がありました。日本は選手24名，役員4名のJARL派遣選手団が参加しました。

【8月16日 開会式】

19時から宿舎に隣接する森林公園の広場（野外劇場）で開会式が開催されました。サマータイム期間でもあって，21時頃まで外は明るく照明も不要でした。表彰式と閉会式もここが会場で，屋外ですが雨が少ない季節で雨天は想定していないようでした。

式典では，地元リトアニアの伝統的な歌やダンスが披露され，参加者たちはその文化に触れながら交流を深めました。合唱リーダーの声掛けで多くの選手が前に出て，手をつないで輪になって踊りましたが，派手な演出はなくても，とても楽しいものとなりました。

【8月17日 クラシック第1競技】

最初はクラシック競技で，3.5MHz帯は走行距離が長いTX配置で若年者のクラス，144MHz帯は距離が短い年配者のクラスです。会場は宿舎から西へ直線で約6kmの位置で，ビルシュトナスの外周を取り巻くように流れるネマン川の対岸地域でした。

各競技会場の地形は大きな山はなく，ほとんど平らで高低差があるとしても川が年数をかけて浸食したような低い地形を作ったのちに，水が無くなって砂地のような土壌が残った感じでした。日本で例えると防風林の中のように砂地に腐葉土が堆積したような平らな広い土地のような感じです。砂地のためか少し柔らかくて下草も低いため視界が広く，茨系の草はなくて走りやすい環境でした。

日本はW19クラスのチーム対抗（クラシック競技のみに設定）の3位となってReg.3圏で唯一のメダルを獲得しました。日本の女子高校生も強豪のウクライナやチェコの背中を間近に見るまでになりました。

3.5MHz帯ではスタート直近のTXが強く聞こえたことで，距離感が惑わされて大きなロスをしてしまいました。国内でトップクラスの走力の選手であっても，全TXを獲得してフィニッシュに向かう途中に脚が攣って動けなくなってしまいましたので，世界大会の厳しさを実感させられました。

【8月18日 スプリント競技】

各競技は宿舎から約500mの位置にあるバスターミナルに集合してから移動するのですが，この日はバスを使わず徒歩での移動でした。ビルシュトナス到着時に水浴びを楽しむ人々を見かけた池の畔がスタートでした。目前の森林が第1ループで，次の第2ループへ向かうスペクテーター走行コースが250mと長かったのですが，その間にある家屋が並ぶ地域に選手を入れないためかもしれません。走行コースの出口が観覧場所で，フィニッシュでもあるそこは開会式が行われた広場でした。第2ループは宿舎に隣接する森林公園が使われ宿舎施設の近くにもTXが設置されていました。

12秒と短い送信時間と短時間決戦のスプリント競技は，僅かのミスで順位を落としてしまいます。スタートしたがヘッドホンが故障していたり，直近にTXがあるのに何回も聞いてしまったりと苦労しました。それでも，国内で体験する機会が増えているからか，探査対象全TXを獲得した日本選手は14名と過半数でした。

19時から開会式が行なわれた会場で表彰式。日本選手団はW19チームが表彰台

に上がるので張り切って参加しました。表彰台に上がるのはウクライナ・チェコ・ドイツの選手が多く，改めて圧倒的な強さを実感させられました。

【8月19日 休養日】

中日となるこの日は運営側による小旅行などは企画されない完全な休養日で，参加者は自由に過ごしました。日本チーム有志は路線バスでかつての首都カウナスに行き，杉原千畝記念館などを見学しました。ビルシュトナスに残った者は周辺の散策を行いましたが，

ちょっと気になる街外れにある高さ55mの展望タワーには各国の参加者が自然と徒歩などで集まりました。

夕方に日本選手が経験の少ない翌日のFOX-O競技に備えて探査練習を行い，TXへのアプローチ方法などを確認しました。宿舎に戻ってからは過去の競技地図の画像を見て描かれ方を復習しました。

【8月20日 FOX-O競技】

宿舎から南へ約30kmの位置がFOX-O競技の会場でした。2025年1月に国際競技規則が一部改正され，FOX-O競技地図の縮尺が1：15000または1：10000に規定され，高齢者のクラス（W55以上とM60以上）は1：7500が推奨となりました。本大会では改正規則に対応して高齢者が1：7500，他が1：10000でした。TXの配置は高齢者クラスの競技地図の範囲内に8個，外側に2個でした。

日本選手にとって一番馴染みの薄い競技部門だけあって，現在地を勘違いしたり，現在地の確認に慎重になりすぎると移動速度が落ちて苦労しました。探査対象全TXを獲得できたのは4名だけで，多くがオリエンテーリング競技の経験者でした。

【8月21日 クラシック第2競技】

最終競技の若年者は長距離で144MHz帯，短距離の年配者は3.5MHz帯。競技地域はクラシック第1競技の北側が使われました。競技地図では南北約1kmの範囲が重なっていて，第1競技のフィニッシュ近くにもTXが配置されていました。

日本は今回もチーム対抗でW19クラスが3位と

Reg.3圏唯一のメダル獲得でした。他にW45・M60・M70クラスが探査対象の全TXを獲得しましたが，惜しくもメダルには届きませんでした。個人成績は第1競技では1名だった全探査対象TXの獲得者が11名と大きく増えました。川を渡り，崖を上って体力を消耗してしまい，制限時間が迫って不安になってもフィニッシュの歓声が聞こえれば，力が湧いてきて再び走り出せる世界大会の凄さを体感して最後の競技を終えました。

後半2競技の表彰式と閉会式を終えたら，スプリント競技スタート近くのホテルに移動してハムフェスト（晩餐会）です。外国選手とは臆することなく英語とジェスチャーを交えて会話しました。折り鶴の折り方の披露は好評で，日本の伝統文化を紹介しながら交流できました。外国選手と意気投合して，それぞれの国

を象徴したデザインの競技ウェアを交換する場面もありました。同じ趣味を介して生活や歴史の背景が異なる中でも，お互いを理解し合える楽しさを実感しました。

【鍛えられて成長】

個人成績では上位に入りませんでしたが，国内大会よりも厳しい設定の中で全TXを獲得できた選手が増えたのは大いなる収穫です。各選手は参加が内定した3月以降は各地の競技大会に参加しながら，大会が無い週は世界大会を見据えた練習会に参加しました。練習会は東京・埼玉・群馬・新潟・静岡で合わせて19回開催し，延べ221名が参加しました。ARDFerの協力で壮行競技大会も企画されました。国際大会に出場経験が豊富なベテラン選手が「世界大会前にこれほど練習したのは初めて」と語るほど鍛えられた効果でしょう。

全対象TXを獲得できるようになりましたが，次は所要時間を縮めるのが課題になります。未だヨーロッパのトップ選手との力の差は大きいとはいえ，日本選手の競技能力は確実に向上しており，今後に期待が持てます。

高校生選手（W19・M19）は全員が国際大会初参加でした。前年の全日本ARDF競技大会の上位成績者ですが，外国選手の走りには強い衝撃を受けていました。沼があろうと，草が生い茂っていようと，迷わず直線的に突き進んでいく外国選手の姿は圧巻でした。改めて世界のレベルの高さを感じたそうですが，世界大会の経験は今後の成長につながります。帰国後は全日本大会に向けて世界大会の反省点を踏まえ，各自の弱い部分を重点的に見直しをおこなうトレーニングに変わりました。

各種資料　http://www.ardf.jp/world/2025w/2025w.html

22ND WORLD
ARDF CHAMPIONSHIP
15-22 Aug 2025
Lithuania